発　表　要　旨

特別講演　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 30

課題研究　シンポジウム　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 31

ワークショップ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 38

ラウンドテーブル　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 42

自由研究発表Ⅰ（9 月 10 日）

協同学習・グループワークⅠ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 50

協同学習・グループワークⅡ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 56

学士課程教育Ⅰ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 62

学習意欲・動機Ⅰ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 68

学習成果・効果測定　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 74

授業デザイン　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 82

中途退学防止・学生の定着Ⅰ・特別学修支援

（発達障がい学生支援他）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 90

自由研究発表Ⅱ（9 月 11 日）

ピアサポート・教職協働　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 98

スタディスキルズ・文章表現　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 104

学士課程教育Ⅱ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 110

高大接続　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 116

キャリア教育・ジェネリックスキル　・・・・・・・・・・・・・・　p. 122

協同学習・グループワークⅢ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 128

中途退学防止・学生の定着Ⅱ・学習意欲・動機Ⅱ　・・・・・・・　p. 136

初年次教育学会 第９回大会
特別講演

初年次教育を活用した学生確保のあり方

【日　時】　2016 年 9 月 10 日（土）　13：55～15：20　（13：30～　開場）

【会　場】　四国大学　共通講義棟　R101・102 教室（収容定員 522 名）

【講　師】　山内　太地氏　（大学研究家・教育ジャーナリスト）

【プロフィール】

島根県立大学 客員教授，一般社団法人 大学イノベーション研究所 所長。大学・高校のコンサルティングと，生徒・保護者・高校教員向け進路講演，本の執筆，TV・ラジオ出演など多数おこなっている。47 都道府県 14 か国・3 地域の 884 大学 1174 キャンパスを訪問。主著には『こんな大学で学びたい　日本全国 773 校探訪記』（単著：新潮社），『下流大学に入ろう！』（単著：光文社ペーパーバックス），『危ない大学』（共著：洋泉社・新書 y），『アホ大学のバカ学生 グローバル人材と就活迷子のあいだ』（共著： 光文社新書）などがある。

【趣　旨】

大会テーマ「初年次教育とエンロールメントマネジメント」にちなんで、今大会の特別講演には大学研究家の山内太地氏をお招きし、「初年次教育を活用した学生確保のあり方」についてお話しいただきます。高等学校の事情にも詳しい同氏の知見にふれることを通して、2018 年から始まる高校生減を乗り切るためのヒントを得ることができれば、と期待する次第です。

◇司　会：奥村　英樹（四国大学）

課題研究　シンポジウム

初年次教育の評価：プログラムとしての評価、学生をどう評価するのか

課題研究担当理事　　濱名　篤
将来構想担当理事　　山田礼子

企画趣旨：（予定）

課題研究委員会と将来構想委員会は、今大会から 3 年間のスパンで中期計画を立て、段階的に課題研究シンポジウムを開催する。研究の大テーマは「初年次教育の評価とは何か」である。

1 年目の今大会では、初年次教育の類型をいくつかに分類し、「学生個人の達成」と「教育プログラム」という視点からそれぞれの類型についての評価をおこなう。そして、今大会終了後にディプロマシーポリシー（DP)、カリキュラムポリシー（CP)、アドミッションポリシー（AP）における初年次教育の位置づけに関する会員調査を実施する。なお、類型の分類であるが①大学適応型、②学習スキル重視型、③研究基礎重視型とする。

2 年目（2017 年第 10 回大会：中部大学）は、DP・CP・AP との関係から、初年次教育がプログラムとしてどのようにそれぞれに位置づけられるのか、また成果の測り方はどのような形が望ましいのか、といったような視点から議論する予定である。そして 3 年目は 2 年目を参考に検討する予定である。

登壇者：

1）　「学生データを活用した大学適応型初年次教育の実践
～関西国際大学の事例を通して～」
田中　亜裕子（関西国際大学）

2）　「四国大学・短期大学部の学習スキル型初年次教育プログラム」
谷川　裕稔（四国大学短期大学部）

3）　「研究大学における初年次教育の現状と課題
～九州大学の場合～」
川島　啓二（九州大学）

指定討論者：　岩井　洋（帝塚山大学）
司会：井下　千以子（桜美林大学）

日時：9 月 10 日（土）15：30～17：40
場所：共通講義棟　1 階　R101・102 教室

学生データを活用した大学適応型初年次教育の実践

～関西国際大学の事例を通して～

田中亜裕子（関西国際大学）

１．　適応型初年次教育とは？

本課題研究では、適応型の初年次教育の事例として関西国際大学の実践を報告することを求められた。適応型の初年次教育の定義は明確に共有されているわけではない。そこで本報告では、高校教育と大学教育の学習環境の違いから生じる学習面、対人関係等の様々なギャップを小さくすることで、大学生活への適応の促進をねらいとしている初年次教育を適応型と捉える。そして本学での実践をその一例として、初年次教育の可能性と課題を明らかにしていく。

２．必修型初年次教育導入の経緯と現在の初年次教育プログラム

本学は 2001 年から必修型の初年次教育プログラムを展開してきた。1998 年の開学と同時に全国初の学習支援センター（2015 年度より学修支援センターに改名）を設立し、アカデミックスキルが不十分な学生への支援をスタートした。しかし、その利用者の多くは学習の課題に気づいた能動性の高い学生が中心であり、アカデミックスキルが不十分な学生が積極的に来所することはまれであった。そこでこれらの学生にも必要なプログラムを受講させるために、全学共通の必修型初年次教育を推進することとなった。必修型初年次教育の流れと内容は図１のとおりである。

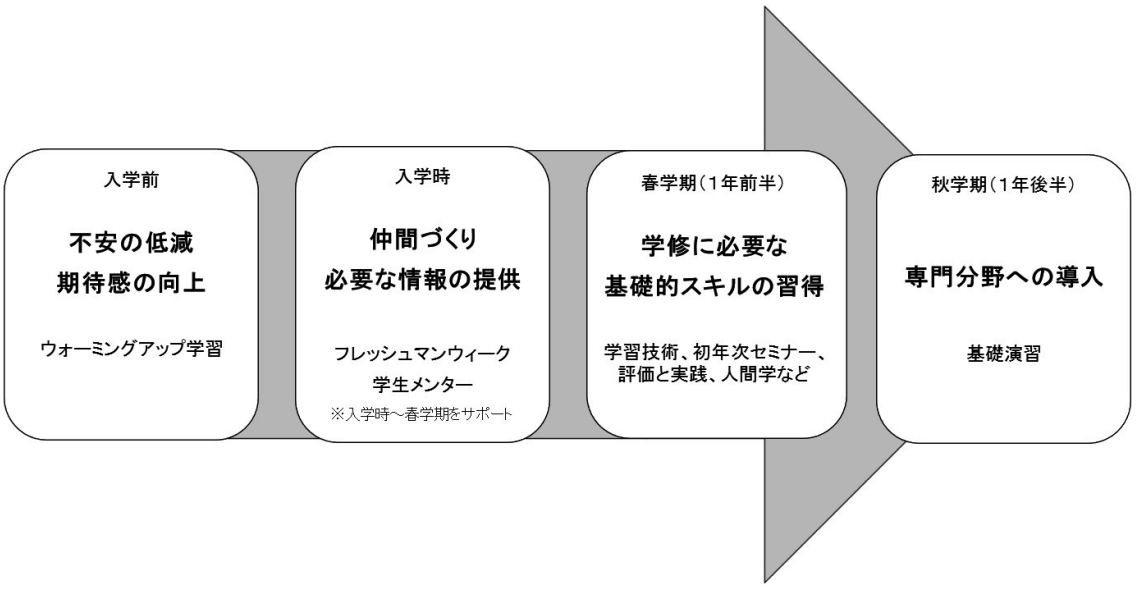

図１　関西国際大学における初年次教育の流れと内容（2016 年度）

３．学生の多様化への対応

全学共通の必修型初年次教育と併せ、個別の支援体制も整備した。健康状態の確認が必要と思われる初年次生を、保健室と学生相談室が調査票を用いて把握し、該当する学生に対して 4 月末までに面談を実施している。また、4～5 月中に欠席の目立つ学生の情報を、学修支援センターが教員を通じて収集し、その結果を活用しアドバイザーによる個別面談を行っている。さらに、2007 年度には学生メンター制度を導入し、学生による初年次生のピアサポートをスタートしている。しかし、これらの取組だけでは、中退や不適応問題が解消するという成果にはつながらなかった。

①　学生支援型 IR データの活用

学生の多様化傾向が強まりつつある状況に対応し、2013 年度に新たな取組[1]を始めるとともに、学生支援型 IR データを活用し、学生の個性に応じた支援について検討を始めた。基礎学力、成績、欠席状況、アンケート調査などの学生個人のパネルデータを用いて、IR 部門が学生の適応状態について分析し、その結果を FD、SD において共有することからスタートした。

2013 年度には、「大学への適応過程に関する調査」(学生行動調査)を用いて、学生の特徴を全体、キャンパスごと、学科ごとに明らかにした。この分析から、学科によって学生の特徴に違いがあることを確認し、それぞれに必要な支援体制のあり方を示した。

2014 年度には、成績不振の学生層と中間層の学生の特徴を比較した。この分析から、成績不振学生に対する支援として、1 年次早期には学習スキルや学習習慣を身に着けるための支援プログラムが必要であり、2 年次には学習サポートのみならず、生活リズムの改善やメンタル面におけるサポートについて検討する必要があることを示した。

② ターゲット層に対する積極的個別支援

2015 年度には、人間心理学科と学修支援センターが連携し、成績不振学生に対する積極的個別支援を試行した。2014 年度生（当時 2 年生）のうち、累積 GPA、1 年秋 GPA のいずれかが 1.7 未満の学生を対象に、「レポート対策プログラム」または「生活リズム改善プログラム」の該当プログラムの受講を呼びかけた（人間心理学科教員と学修支援チューターが担当)。「レポート対策プログラム」については対象者の 56.7%、「生活リズム改善プログラム」については対象者の 23.5%から申し込みがあり、プログラム受講者のうち 82.4%の成績が上昇した（プログラム非対象者の成績上昇率は 50%超)。

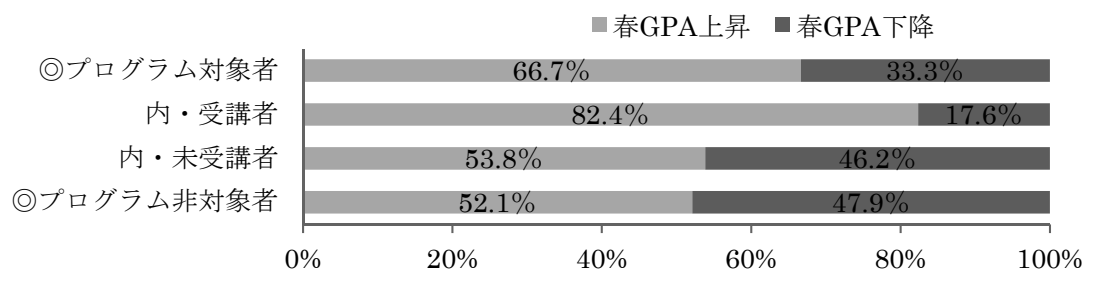

図２　2014年度生　GPA変化（1年秋→2年春）

４．学位プログラム別の初年次教育プログラムの検討

本学では 2016 年度に 3 つのポリシーの見直しを行い、学位プログラム(学科単位)ごとにポリシーを書き改めた。これに対応し、初年次教育部門でも、全学共通必修型プログラムを学科ごとにカスタマイズする作業に取り組み始めている。この背景には、前述のような IR データの分析結果や新たな取り組みの成果、そして到達目標や大学への適応をめぐる課題にも学科ごとに違いが生じその傾向は年々顕著になっていることがあげられる。目的養成型と人文社会科学型の違い、実習や学外研修等も含めたカリキュラムポリシーの違い、入学者の基礎学力や学習習慣などの偏り、進路の違い等を考慮し、学位プログラム別の初年次教育のカスタマイズを行い、内容や方法のさらなる改善が必要な時期に来ている。

５．これからの課題と方向性（当日）

[1] 全一年生を対象としたアドバイザーによる個別面談と、学修支援センターによる基礎学力強化プログラム

四国大学・短期大学部の学習スキル型初年次教育プログラム

谷川裕稔（四国大学短期大学部）

１．目的

本発表の目的は，学習スキル型初年次教育を採る本学（四国大学・短期大学部）の取り組みを紹介することにある。その際，評価方法の可能性について若干ではあるが言及する。

２．四国大学・四国大学短期大学部の初年次教育

（１）背景：どうして初年次教育を導入したのか

本学は「学生にとって魅力ある大学とは何か」をテーマとする大学の諸活動全般にわたる行動計画を定めた「学校法人四国大学　大学改革ビジョン 2011」を策定した。学園の全組織を挙げて全 5 カ年の計画に取り組んでいる（2011～2016 年度）。ちなみに，2011～2013 年度の検討期間を経て，2013 年には「教育改革プログラム 2014」が策定され，2014 年度以降の入学生から新カリキュラムによる教育がおこなわれることになった。

これは 2018 年問題を見据えた，つまりは「学生確保」を意識した教育改革である。その文脈で，初年次教育プログラム（初年次ゼミⅠ，初年次ゼミ II，初年次ゼミ）が新設された。

（２）カリキュラム上の初年次教育の位置づけ：どうして学習スキル型なのか

本学の初年次教育が学習スキル型を採っている理由を説明するために，教育改革によってリニューアルした「全学共通教育科目」を概観する。

まずは，改革により設定された本学が期待する学生像について紹介する。これは改革の礎となるものである。本学の建学の精神である「全人的自立」を具現するための基盤となる要素でもある。

設定する能力	内容と能力例
社会人基礎力	学生が卒業時に社会人として自立するために必要な基礎的・基本的な力。 （社会人マナー，基礎学習力，情報活用力）
自己教育力	意欲的に取り組む技術や方法を身に付け，絶えず努力する力。 （自己理解・省察力，目標課題設定力，向上・探求する力）
人間・社会関係力	社会において他者と協調するとともに，積極的に社会を支える力。 （コミュニケーション力，対人親和力，社会貢献力）

次に初年次ゼミのカリキュラム上の位置づけを確認するために，「全学共通教育の５つの科目区分」を提示したい。科目区分には「スタンダード関係科目」「初年次・基礎教育科目」「キャリア教育科目」「教養科目」「外国語科目」があるが，教養科目と外国語科目は紙幅の関係にて割愛する。ちなみに全学共通教育科目の企画運営は，全学共通教育センターがおこなっている。

科目区分	授業科目開設の目的	科目	
		四国大学	短期大学部
スタンダード関係科目	「全人的自律」を見学の精神に掲げる本学の全ての学生に，学部学科等の専門の枠を超えて、卒業時に共通して見につけてほしい基本的な資質・能力を「四国大学スタンダード」とした	社会人基礎力入門	社会人基礎力入門
		自己と社会	自己と社会・地域論
		教養国語	情報処理
		情報処理	
初年次･基礎教育科目	大学入学直後に，レポートの書き方，討論，文献資料の検索，コミュニケーションなど，大学での学習に必要な知識や技術，学生に求められる常識･生活態度などを身につけることを目的とする。また，大学教育へスムーズに移行するために必要な基礎知識を修得する科目も配置している	大学入門	初年次ゼミ
		初年次ゼミⅠ	
		初年次ゼミ II	
		数学基礎	
		物理学基礎	
		化学基礎	
		生物学基礎	
キャリア教育科目	在学中に，望ましい職業観，勤労観および職業に関する知識や技能を身につけるとともに，自己の個性を理解し，主体的に進路を選択する能力・態度を育て，人生を設計する力を育むことを目的とする。	キャリア形成入門	キャリア形成入門
		キャリア形成実践	キャリア形成実践
		キャリア開発	キャリア開発

左の表から明らかなように，学習スキル型初年次教育を導入した背景には，広義での初年次教育プログラム内容であるスタンダード関係科目やキャリア教育科目と区分したことがある。それが学習スキル型に特化したプログラムに初年次教育科目（ここでは「初年次ゼミ I」「初年次ゼミ II」「初年次ゼミ」）が位置づけられた主因である。

（3）学習スキル型「初年次教育」の内容

本学の学習スキル型初年次教育は，「初年次ゼミ I」「初年次ゼミ II」（大学），「初年次ゼミ」（短期大学部）である。初年次ゼミは①高校の学習から大学での学習にスムーズな移行をする，②大学での学修や人間的な成長に向けて必要な基礎的知識･技術を習得する，③自主的な学習態度を身につける，ことを基本として，❶大学生活における時間管理・学習習慣，❷ノートテイキングの方法，❸リーディングの方法，❹図書館・情報実習室での情報収集，❺レポート・小論文等の文章技法，❻プレゼンテーションの技法，を学生が習（修）得することを目的としている。

１つのクラスは基本 15 名で構成され，担当教員の所属学科専攻の学生以外の学生がクラスに数名含まれている。担当教員は原則最低 3 年間（同科目を）担当しなければならないことになっている。学生によるピアメンター(チューター)サポーター制度は採っていないが，合理的配慮が必要となる学生に対しては，学修支援センターと連携を取りながら担当教員のサポートを(学修支援センタースタッフあるいはピアチューター)おこなう計画が立てられつつある。

３．初年次教育の現状：どこまで実現されているのか（３つのポリシーとの関係）

まず，３ポリシー(以下，AP，DP，CP)との関連での初年次教育に係る課題を確認しておく。

３ポリシー	初年次教育の課題
アドミッション・ポリシー	高等教育機関が目指すそれぞれの「学士力」涵養の端著としての役割を担えているか。
カリキュラム・ポリシー	初年次教育が学士課程教育（特には専門課程教育）と有機的な結びつきがなされているか（カリキュラムの体系性・系統性が保障されているか）。
ディプロマ・ポリシー	学習（修）成果と一体化した出口管理に寄与できているか。

次に本学の初年次ゼミが本学の設定する 3 ポリシーに対応できているのか，である。本学の AP は，建学の精神「全人的自立」に礎とした内容となっている。学習スキル型初年次ゼミのみならず，スタンダード関係科目，キャリア教育科目がその内容をカバーしている。CP についてはカリキュラム改革（大学改革 2011）により学習スキル型初年次ゼミと専門科目との有機的連続性がカリキュラム上では一応なされている。DP であるが，現時点では成否の判断をする材料がそろっていない。

４．問題点と今後の課題

本学の初年次ゼミの実施上の問題点は，①「初年次教育」プログラムの重要性に係る担当教員の理解，②方法論（内容）についての担当教員・間のコンセンサスの確立，③評価方法の開発，などである。

①②については，年数回の研修会（全学共通教育センター主催）の実施等で対応している。問題は③の「評価方法」である。学生と担当教員による「自己評価」を積み上げてきてはいるものの，プログラム全体をカバーする評価方法が定まっていないというのが実際のところである。

評価方法を模索するためのひとつの可能性として，初年次教育学会の研究発表を分析するという手続きがある。筆者は全国大会の過去 3 ヵ年の評価方法に関する自由研究発表と学会誌に掲載されたそれに関する論文の整理を試みた。その作業により，初年次教育における評価方法のトレンドを得ることができた。本報告では，最後にその傾向性を提示することを通して，本学の初年次教育に関する評価方法のあり方を模索したい。その際，学習スキル型初年次教育プログラムに係る新しい評価アプローチを提案することも視野に入れている。

研究大学における初年次教育の現状と課題

～九州大学の場合～

川島啓二（九州大学）

１．九州大学における初年次教育科目：「基幹教育セミナー」「課題協学」

①目的：アクティブ・ラーナーの育成、「学び方」を学ぶ

②内容：H23 基幹教育院の設立、H26 カリキュラム開始、
基幹教育カリキュラムの全体像（48 単位）、学士課程から大学院まで
「基幹教育セミナー」：23－4 人の小クラス、全学必修、全学部混合クラス、
週 1 コマでセメスター、大学における自らの学びについて対話と省察（グループワーク）を経て 12 分間の「発表」、リフレクトシート、フィードバックシート等の「小道具」
「課題協学」：1ユニット＝小クラス（50 人）×３、全学必修、全学部混合クラス、
２コマ連続で２セメスター、教室テーマと協学課題、４週 8 コマで１クール、
個人作業＋グループワーク、

③実施体制
基幹教育委員会－基幹教育実施会議－科目実施班連絡会議
実際の授業運営は教員 3 人を一組とするユニット体制：リーダーは基幹教育院教員

④評価
学生に対する授業アンケート
教員に対するアンケート

２．九州大学における「初年次教育」の位置づけ

①ドラスティックな教育改革（基幹教育）の中での「看板科目」
② not only 大学への移行 but also 研究マインド
③ Late Specialization or Early Exposure
④ 学生支援

３．今後の課題

① 基幹教育カリキュラム全体の中での位置づけ
② 全学出動体制の機能化
③ 学生・院生のコミットメント（TA、ピア・サポート）との連動

企画セッションⅠ（9/10 10：00~12：00） ワークショップ 内容一覧

題　　目	演劇的知を教育活動に取り入れる-パフォーマティブラーニング-
教　室	A 館　A409
担当者名・所属	安永　悟（久留米大学）、Gehrtz 三隅　友子（徳島大学）
概要 （内容要旨）	近年、教育や研修にインプロ（impro,impprov）＝即興劇をとりいれる機関や組織が増えている。インプロは、脚本も設定も役も決まらない中で、その場で浮かんだアイデアを参加者が受け入れあい、膨らませながら物語を作り、場面を演じながら作っていく演劇活動である。身体的コミュニケーションを使ったこの手法が、組織や個人の日常を揺さぶり、変化のきっかけを作ることが効果として脚光を浴びている。予測不可能な社会に必要な他者との関係つくり、そしてコミュニケーションの再認識を促す。なぜ教育にこのような演劇的知の導入を勧めるのかに対しては次の五つが挙げられる。 ①　教育の二つのねらいに適している　②　ケアの概念が保たれる　③　コミュニケーションを再考できる　④　心と身体とこえの感覚を取り戻せる　⑤　個人から全体の「学び」を体感できる　これらを教師と学習者が共有することによって、新たな学びの関係を基にした授業が展開できると考える。 本ワークショップは、インプロを実際の教室活動（これまでの講義形式・協同学習形式等以外に）に何らかの形でとり入れることを提案するものである。ワークショップの最後には活動を振り返り、個人と全体で互いの発見をすり合わせ、何よりも「演劇的知の体感」を共有したい。
キーワード	インプロ・身体的コミュニケーション・演劇的知・パーフォーマティブラーニング

題　　目	学生の経験を言語化し、学びを深めるライティング指導 ―TAE（Thinking At the Edge）をベースにした「経験をことば化する方法」―
教　室	A 館　A410
担当者名・所属	成田　秀夫（河合塾）、山本　啓一（北陸大学）、得丸　智子（開智国際大学）
概要 （内容要旨）	アクティブラーニングが広がり、学生が発信する機会が増えているが、情報を検索して「再発信」するだけに陥ってはいないだろうか。真に発信の「主体」として、学生自身の経験に根ざした思考の発信を促すべきだろう。 このような問題意識のもと、私たちの研究グループは、経験から得た知恵（身体知、暗黙知）をことばで表現する方法（「経験のことば化」と呼ぶ）を模索してきた。今回は、哲学者ジェンドリンが創始し、得丸（2008 他）が表現活動としてデザインした TAE（Thinking At the Edge）をベースに、初年次教育で実施可能な「経験をことば化する方法」を紹介する。この特徴を要約すると、次のようになる。 ・内省を促し、思考力と表現力を一体のものとして高める ・経験を相対化し意味づける文章表現へと、段階的・系統的にプロセスをデザインする ・他者との共有や、アカデミック・ライティングへの接続に開かれている 本ワークショップでは、時間が許す限り、「記憶の断片を小カードに書き取り広げて俯瞰する（データ化）→小カードを類似性によりグループにする（グループ化）→グループ内類似性、グループ間関連性を短く表現する（パターン化）→キーワードを選定し主張の核心を論理的に表現する（構造化）」という一連の手順を体験してもらいたいと考えている。
キーワード	TAE、経験の言語化、アカデミック・ライティング

題　　目	2030 年の初年次教育から見える今―未来を思うことで今を考える―
教室	A 館　A411
担当者名・所属	田中　　岳（東京工業大学）、立石　慎治（国立教育政策研究所）
概要 （内容要旨）	「2018 年問題」に大きな関心が寄せられています。18 歳人口が再び減少に転じ、志願者（入学者）減という現実が切実さを増すためです。そして、その先 2030 年には 100 万人を切ることが見込まれています。各大学は、いよいよ正念場といったところでしょう。 では、2030 年度の初年次教育は一体どのようなものでしょうか。大学間のサバイバル競争という課題はあえて保留し、大学関係者として 2030 年の初年次教育を考えてみようとするのが、本ワークショップのねらいです。 とはいえ、願望や確信からではなく、起こり得る状況（可能性）の吟味がスタート地点になるでしょう。2030 年に起こりうる将来像を反省的に捉えることで、現在を再考することに繋げていくという試みです。このプロセスを通じて、現在の初年次教育を動かしている「ドライビング・フォース」があぶり出されていきます。自身の考える（考えてきた）初年次教育へのアプローチを捉え直してみたい方の参画をお待ちしています。 ［目標］ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語ることができるようになる。［役割］担当者は会場の相互作用を活性する進行に努めますので、参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。［過程］ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体での共有までを計画しています。
キーワード	2030 年、組織化（アプローチ）、シナリオプランニング、人口減少社会

企画セッションⅡ（9/11）　ワークショップ一覧

題　　目	初年次学生に対するプレゼンテーション指導法
教　室	A 館　A409
担当者名・所属	長山　恵子（金沢工業大学）
概要 （内容要旨）	初年次教育においても座学中心の授業からの脱却を図り、グループ討議やグループ演習などを実施し、その結果をプレゼンテーションさせる授業が増えています。プレゼンテーションの実施にあたっては説明内容の充実度を評価することは当然ですが、聞き手に伝えるための技法（話し方や態度、提示資料の作成方法）も重要であることを併せて指導する必要があります。本ワークショップでは、プレゼンテーション技法の説明におけるポイントとその技法を活用するための演習の進め方を説明します。さらに演習を通して学生が自身のプレゼンテーションの良い点と改善点を把握するための評価方法とそのフィードバック方法についても検討します。参加者の皆さんにも実際に演習の一部を体験していただきます。 以下にワークショップの流れ（予定）を示します。 １．ウォーミングアップ（自己紹介、アイス・ブレーキングなど） ２．プレゼンテーション技法の説明 １）内容のまとめ方（ストーリー展開を考える） ２）話し方 ３）提示資料の作成 ３．プレゼンテーション演習 １）演習の進め方 ２）評価の仕方
キーワード	プレゼンテーション技法、動機付け、評価方法

題　　目	「学力の三要素」を総括的に育むアクティブ・ラーニング
教室	A 館　A410
担当者名・所属	川島　啓二（九州大学）、池田　史子（山口県立大学）、久保田祐歌（徳島大学）
概要 （内容要旨）	『高大接続システム改革会議』「最終報告」が提出され，すべての学校段階を通じて，一貫した学習目標としての「学力の三要素」を総括的に育むことが求められていることが，より明確になりました。そのような学習目標の達成のために，アクティブ・ラーニングの方法を効果的に採り入れること，学習プロセスの自己調整と能動的な学習のために振り返りの機能を適時に組み込むことは，これからの授業デザインとして必然的な方向であると言えます。 本ワークショップでは，平成 26 年度にクリティカル・シンキングを育成する授業デザインを，平成 27 年度にその学習プロセスの評価方法をとりあげました。本年度もその延長線上に，「思考力」を他の学習要素から切り離さずに，「学力の三要素」を総括的に捉えて，さまざまなアクティブ・ラーニングや振り返りの技法によって構成された模擬授業をご体験いただくことで，３年間の総仕上げといたします。 大学の初年次教育ご担当の方はもとより，高等学校教員の方のご参加もお待ち申し上げております。
キーワード	「学力の三要素」，アクティブ・ラーニング，ジグソー法，グループ学習

題　　目	モデル授業公開検討会（2）：ノートの取り方
教室	A 館　A411
担当者名・所属	藤田　哲也（法政大学）、中川　華林（法政大学大学院）
概要 （内容要旨）	本ワークショップでは，担当者（藤田）が実際に法政大学で行っている初年次教育科目である「基礎ゼミ」について，実際に模擬授業を行い，授業後に参加者と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をする。今回は「ノートの取り方」の授業を行う。「ノートの取り方」は，単なるスタディスキルの一つではなく，学生が「大学では自主的・自律的に学ぶ必要がある」ということを頭で理解しているだけの状態から，実際の行動に反映させるべきこととして認識を改めるための，絶好のテーマである。にもかかわらず，授業担当者からは，学生の「ノートの取り方なんて大学で教えてもらわなくても大丈夫」という主張に気圧されて，表面的・形骸的な指導を行うのみで終わってしまうと聞くことが多い。むしろ「ノートの取り方」は，学生に初年次教育全体の意義に気づいてもらえる，最重要テーマの一つであるといえる。本ワークショップでは「授業内模擬授業（中川が担当予定）」の工夫などを実演しつつ，「ノートの取り方」にいかにして初年次教育の教育目標を反映させられるかについて皆様と討論する予定である。参加者の皆様には，前半は学生の視点で授業を受けていただきたい。後半の冒頭では，指定討論者（中川）から，授業をよりよくするための議論を促す，いくつかの論点を提示するので，まずはそれらの論点について全参加者で意見交換をしたい。その後，参加者からの自由な質疑応答も行う予定である。
キーワード	初年次教育モデル授業，授業検討会，気づき，シラバス